

氏名(本籍)	飯島広子(長野県)		
学位の種類	博士(芸術学)		
学位記番号	博甲第2,193号		
学位授与年月日	平成11年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	伝聖徳太子筆『法華義疏』の書風と解釈に関する実証的研究		
主査	筑波大学教授		角井博
副査	筑波大学教授	文学博士	相馬隆
副査	筑波大学助教授	農業博士	鈴木雅和
副査	東京家政学院大学教授	芸術学博士	眞保亨

論文の内容の要旨

宮内庁で保管する『法華義疏』(四卷本)は、聖徳太子(574~622)が著した法華経の注釈書で、維摩経義疏・勝鬘経義疏とともに「三経義疏」と呼ばれ、太子の三部作として世に知られている。四卷本に署名はないが、巻一冒頭に奈良時代の筆と思われる添書「此は大委国上宮王私集非海彼本」があり、古くから太子自筆の草稿本として喧伝されてきた。

それは、中国六朝から隋にかけての影響を受けたと思われる首尾一貫した書風と、巻中に見られる削字訂正の痕跡、また貼紙による加筆修正、さらには継紙による改稿などが、いかにも自筆草稿本とするに足る形状を呈しているし、朝鮮半島百濟から仏教や書法など諸文化が伝来したあと、太子が仏教に深く帰依し、大いに興隆せしめた歴史の事実にあざわしい遺品だからである。「法隆寺東院迦藍縁起資材帳」によると、天平宝字5年(761)夢殿の復興に際し、律師行信がこれを寺に奉納したとあるが、それから永く法隆寺に襲蔵され、明治年間の法隆寺荒廃に伴うご下賜金に対する返礼として、他の美術工芸品とともに帝室に献納され、今にいたっている。その間のわが国における聖徳太子奉讃の精神、厚い太子信仰の実態からしても、この四卷本は唯一対の太子真蹟であり、しかも、現存するわが国最古の紙本肉質の文字資料として高い評価を博してきたのである。

本論文は、如上の性格を有する『法華義疏』の巻一及び巻四のおよそ5万字をコンピューターに画像データ化し、それによって本文の書風を分析・考察するものであるが、とりわけ巻中に散見する改訂・補筆・貼紙・継紙による修正箇所を焦点をあて、仮説をたててデータベースを応用し、それが本文と異筆であることを考察・実証するとともに、その箇所が仏教界においてこれまで論争されてきた内容を解釈するうえで重要な意義をもつことを提言したものである。

本論は、その研究内容が全7章によって構成されている。まず第一章・序論において本研究の目的・背景・意義などを述べ、第二章において原本の現状及び伝世の歴史的背景を解説し、さらに第三章において研究の方法を説明し、以下、第四章『法華義疏』の書風に関する先行研究と本研究の仮説、第五章・法華義疏所依の法華経並びに諸疏との関連とその解釈、第六章・『法華義疏』に見られる改補修正貼紙の書風、と題して論述を展開し、第七章において新たな提言を掲げつつ結論を示している。各章の構成及び論旨は下記の通りである。

第一章・序論は、従来の書学の不備を指摘し、これからの方法論を模索する中で、本研究における目的・背景・意義などをまず掲げ、その論の展開について自説を標榜したものである。第一節において研究の目的を述べ、第二節において従前の研究成果を概観し、第三節研究の意義において本研究の独自性と位置付けを論述している。そして、第四節論文の構成において、本論展開の方向性を概説している。

第二章・原本の現状及び伝世の歴史的背景は、本研究の研究対象である原件について詳説するもので、まず第一節において宮内庁に伝存する『法華義疏』（四卷本）の現状について基本的なデータを解説し、つづく第二節において文献等に記載される法隆寺伝来の経緯、第三節において仏教の伝播と聖徳太子の信仰の度合い、そして筆者たるべき関連の強さを説明している。

第三章・研究の方法は、第一章で示した研究目的を達成していくための研究方法を論述するもので、まず第一節において研究フローを提示して具体的作業の流れを説明し、第二節において書風分析のための原件資料を設定し、書風に関する先行研究を調査するとともに、仮説を立てて研究の方向性を示している。第三節はもっとも基本的作業であるデータベースに関する論述で、書学全般の応用を視野に入れたデータベースの構築や異筆断定のための独自の「法華義疏画像データベース」構築について論を進めている。さらに第四節において異筆箇所解釈や文献資料を紹介し、第五節においてそれら研究アプローチの相互関係をまとめている。

第四章・『法華義疏』の書風に関する先行研究と本研究の仮説は、四卷本に対する先行研究を渉猟し、内容を分類検討するものであるが、さらに従来論議されていない書風解釈に関して研究の独自性を明確にし、仮説を立てて立証することによって影響を及ぼすであろう関連事項について新たな問題を提起している。第一節では四卷本の書写年代に関する二通りの先行研究、すなわち中日書道史を概観しての総論と、具体的に文字列を比較分析しての各論を紹介し、つづく第二～四節において巻中に散見する改補修正貼紙の存在・場所・書風に関わる先行研究の各様を記述し、以後に展開する自論の伏線としている。第五節では書風分析に関わる西川寧氏説を応用した場合に該当しない巻四第六紙を発見し、異筆という仮説を立てて実証しようとする独自の見解を提示し、第六節において書風分析を進める対象範囲を選定し、第七節において仮説から導きだされる関連事項として要求される飛鳥時代における仏教の伝播と動向、仏典の解釈の争点、四卷本に対する旧来の解釈を文献資料に求めている。

第五章・法華義疏所依の法華経並びに諸疏との関連とその解釈は、自ら新説を主張しようとする箇所の書風と内容解釈との関連が深いことを前提に、まず原件の内容・実体を確認しようとするもので、第一節『法華経』の成立過程と『法華義疏』との関連、第二節『法華義疏』と法雲の『法華義記』及び南北朝における仏典解釈、第三節『法華義疏』と吉蔵の『法華玄論』及び隋朝における仏典解釈、第四節『法華義疏』に見られる諸疏の影響と仏典解釈に関する疑念の4節にわたり、法華経の成立と解釈に関する変遷、そして異筆部分の仏典解釈に関する疑念を提言している。すなわち、『法華義疏』の重要部分と解釈される叙述が巻四に集中しており、それに該当する本文が実は第六紙に相当し、紙質・墨量・書風を他と異にする疑念を呈し、次章における書風分析の機縁を説示している。

第六章・『法華義疏』に見られる改補修正貼紙の書風は、先行研究及び自らの仮説を立証する具体的な書風の分析を行うもので、第三章で構築した独自の「法華義疏画像データベース」を運用しながらの、言わば本論の中核をなす実証的研究である。考察の対象は全4箇所、各節ごとに事例・字例を掲げ、すべてに画像を配して論証を進めている。第一節は巻一の冒頭、聖徳太子自筆と伝える題号に関する書風の分析、第二節は巻一第三十四紙『方便品』の書風分析で、(1)字形の違うもの、(2)草書体、(3)筆画を省略しないものの項ごとに論を展開している。第三節は巻四『寿命品』に見られる脇書貼紙の書風分析で、(1)法華経本文との照合による修正、(2)先行研究にて自筆とされる改補修正貼紙、(3)後人加筆の可能性のある改補修正貼紙とその内容の項ごとに詳説しており、最後の第四節巻四第六紙『法師品』に見られる貼紙の書風分析において、(1)字形の違うもの、(2)様式の違うもの、(3)筆法により線質が違うもの、(4)筆法の傾向により様式の違うもの、の4条件に分類して異筆であることを明瞭に実証している。

第七章・結論は如上の考察・実証を基に、本研究の成果・特質・位置付けなどを整備したものである。すなわち、①第六章の書風分析により数箇所の異筆を実証し、先行研究を支援するとともに、新説を提示したこと、②第五～第六章の展開により書風分析が『法華義疏』の解釈に関する疑念に大いに資すること、③研究環境整備としてのデータベースシステムを構築したこと、④画像データベースによる書風分析と合わせて内容解釈を導き出す

にいたる新たな方法論を確立したこと、などを挙げて締め括っている。

なお巻末に補論として、本研究を推進するに際して重要な役割を果たした「法華義疏画像データベース」構築の構造を明記し、画像データ化に関する必要性や精度に対する妥当性について論述を加えている。また最後に、参考文献を付記し、様々な条件を与えて抽出した大量の「画像資料」を添えている。

審査の結果の要旨

本論文は、これまで考察が加えられなかった『法華義疏』の改補修正貼紙に関して新たな解釈を加え、巻中に異筆が存在すること、そうした書風分析の結果と内容解釈とが密接な関係にあることを詳細に論述したものである。この分野に関する研究は従来、花山信勝氏、平井俊栄氏らのように、わが国に古く伝来した法華経とその諸疏に関する仏典解釈に主題が置かれており、その書風については隋文化の影響を受けたものとする西川寧氏の論説が見られる程度であった。聖徳太子の唯一絶対の真蹟という思いのもとに、書風についてはむしろ論議を避けてきた嫌いがあり、その意味において本研究は、こうした問題にメスを入れ、新たな方法論を確立し、新説を提示したところにもまず独創性と意義とがある。

著者は永年にわたり飛鳥・奈良時代の書法形成に関心を抱き、かつて法隆寺釈迦三尊像（国宝）の光背裏面に刻された造像記の書風について考察を加えたことがある。光背銘を中心にその前後100年を範囲とする三カ国（中国・朝鮮・日本）の文字資料を比較考察したものであるが、その手法はコピーワークによる文字の調整、鈇と糊による配列という難事を極めるものであった。今回、同時代の『法華義疏』を主題に選び、書風の比較分析を実践するに際し、著者は従来のコピーワークと鈇・糊による手作業では限界があるとの思いに達し、また別様の成果にも期待を寄せ、研究環境を整備する意味において文字を画像として管理し、運用する文字画像データベースの構築を試みた。各文字の音訓による入力はもとより、一文字ごとに巻数・紙数・行数・段数を並べる背番号を付して、自由自在な配列を目途としたのである。その画像データ化など入力作業は困難を極めたようであるが、完成後の作業効率は従来の研究方法の比較にならないほどに有益であり、精密にして詳細な情報処理をする将来性の高い技術であることを思わしめた。今後は、単に「法華義疏画像データベース」にとどまらず、情報資料の共有性を高め、あらゆる方面の研究に資する方法として道標になるものと考えられる。

結局、本論文では、『法華義疏』の巻一及び巻四のおよそ5万文字をコンピューターに画像データ化し、本文の書風を分析・考察し、巻中に散見する改訂・補筆・貼紙・継紙による修正箇所においては仮説をたててデータベースを応用し、それが本文と異筆であることを闡明にしたのである。そして、その箇所の書風分析が仏教界において論議されてきた経義の解釈に寄与しうる重要な意義をもつことをも示唆したのである。従って、この方法の開発によって、著者の目的は概ね達成されたと言うべきであろう。

本論文を全体的に評価すれば、論点にやや狭小のものを感じるが、先行研究の成果を裏付け、自ら仮説を立てて新説を提言するなど、その内容・構成はともに水準に達しているものと思われた。鋭く精力的に解明した労作として、方法論的にも独自性の高い論文として高くひょうかすることができ、美学美術史サイドだけでなく、普く仏教会に対しても多大な貢献を及ぼすものと想察される。今後は、本文と異筆にわたる筆者と書写年代との相関関係、さらには感性・線質を主体とする書風の美的解釈に研究が発展するように一層の精進を期待するものである。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。